S-face

SFC makes the future through researches

ゲノム医療の知識を身につけて がん患者の心に寄り添う看護を

村上 好恵

VOL.
037
2024 Nov. 発行
和の色：つつじ色

変化の大きいがん医療の現場で活躍できる看護師を育成

**ゲノム解析の進歩により、がん細胞の遺伝子変異に応じた治療を行うがんゲノム医療が急速に広がっています。
それにともなって、看護師に求められる知識やケアのあり方も変化しています。
村上好恵教授は、がん遺伝カウンセリングの開始当時から関わってきたパイオニアであり、
がん患者の心に寄り添う「サイコオンコロジー」を専門とした看護を実践してきました。
その経験を活かし、現在は、ゲノム医療時代の看護師育成のための研究と教育に尽力しています。**

サイコオンコロジーでの看護師の役割

サイコオンコロジー（Psycho-Oncology：精神腫瘍学）は、精神医学・心理学（Psychology）と、「がん」の研究をする腫瘍学（Oncology）を組み合わせた造語で、1980年代に確立した新しい学問です。

多くの看護師はがん患者から「もう死にたい」と告げられる経験をしていますが、このような場面で、患者が言いたいこと、望んでいることなどについて全人的なアセスメントを行い、ケアを提供します。「死にたい」と告げられると、精神・心理的問題があるのではないかと考えがちですが、初めに身体症状を評価し、身体的苦痛の有無から確認していきます。そうすることで、例えば「死にたいくらいに痛い」という身体のつらさを見逃すことがなくなります。身体症状のほかにも、精神症状、社会・経済的問題、心理的問題、実存的問題からなる包括的なアセスメントの考え方を活用することで患者の状況を丁寧に検討します。

また、看護師は患者とのコミュニケーションにおいてさまざまなスキルを発揮します。その一つであるSPIKESは、Setting（場の設定）、Perception（対象の認知度を尋ねる）、Invitation（対象の準備を確認する）、Knowledge（情報提供）、Empathy（感情への対応）、Strategy and Summary（要約と今後の方針）の英文頭文字、S、P、I、K、E、Sをつなげたものです。

このようなスキルを活用し、がんの診断告知時から治療期、終末期までケアを提供することがサイコオンコロジーに関わる看護師の役割です。

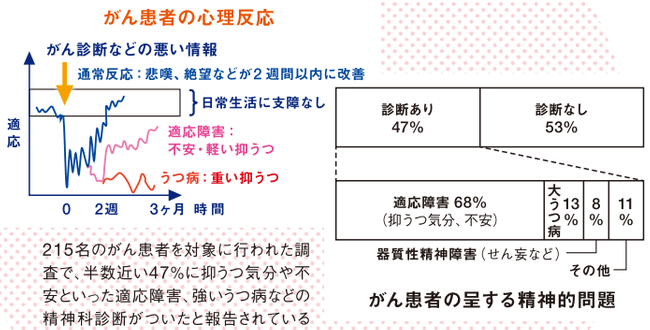
がんゲノム医療に携わる看護師を育成する

サイコオンコロジーと並ぶ研究テーマに「がんゲノム医療と看護」があります。ゲノム研究が進展した近年のがん医療では、がん細胞の遺伝子変異ごとに適した治療法や薬剤を選択することが可能になってきました。

2019年から全国のがんゲノム医療中核拠点病院などで保険診療として行われるようになった「がん遺伝子パネル検査」は、治療の選択肢が限られてきた患者に対して行う検査で、数十から数百個の遺伝子を網羅的に調べ、治験薬や未承認薬などの治療選択を探索するというものです。標準治療法が終了または終了見込みの患者にとって一縷の望みをかけた検査だけに、検査基準に合致しない場合や、検査をしても推奨薬が見つからなかった場合の落胆はかなり大きなものとなります。がん看護を実践している看護師は、そのことを見越して、検査前から患者と家族への支援を行います。

また、検査により遺伝性腫瘍の発症に関連する遺伝子変異が明らかになった場合、告知を受けた患者や家族が過剰な反応を示し、臨床現場が混乱することが少なくありません。その背景として、医療従事者の患者や家族への対応経験の不足が挙げられます。そこで、遺伝性腫瘍への偏見や苦手意識を持つことなく、がんゲノム医療に携わることができる人材育成を行うため、がん看護専門看護師を対象とした教育プログラムを開発してきました。

Cancer patients in mental distress
精神的につらい状況にあるがん患者



215名のがん患者を対象に行われた調査で、半数近い47%に抑うつ気分や不安といった適応障害、強いうつ病などの精神科診断がついたと報告されている（Derogatis LR, et al: JAMA, 1983.）。さらに、がん患者だけではなく、その家族も「第二の患者」と言われるように精神的苦痛を感じていることがわかっている。看護師は、がんという病気に罹患した患者、それを支える家族、そして遺族における心の問題の現状を知り、適切に対応することが重要になる。

Research on training programs for oncology nurses
がん看護専門看護師のための教育プログラムを研究

村上教授は、がん看護専門看護師のための教育プログラムについて研究。遺伝性腫瘍の患者や家族の状況に対するアセスメントの視点について、社会人としての学びやすさに考慮して、e-learningとWEB型交流ディスカッションを組み合わせたプログラムとした。また、遺伝性腫瘍の患者の置かれた状況や、どのようなケアを提供する必要があるのかというアセスメントを重視した教育プログラムも試作。これらを用いて効果的な学習方法を考察すると共に、学習者の傾向などを検証した。

Message for the next generation of nurses in genomic medicine
ゲノム医療を担う次世代の看護師へ

がんに限らず、先天性疾患、循環器疾患など、ゲノムによる医療の変革はどんどん広がるため、今後さらに看護師、特に遺伝看護専門看護師の役割は大きくなる。これからの看護師に望むこととして、村上教授は「ゲノム解析の結果が臨床ベースに組み込まれていくため、看護師が新たな知識と情報をもち、翻弄される患者や家族への支援を実施してほしい。また、全人的に支援するための看護を、看護研究者として開発してほしい」と語った。そのような看護研究者を育成したいという。

遺伝性腫瘍の患者と出会い がん遺伝カウンセリングの道へ

私ががんゲノム医療に関心を持つようになったのは、大学院修士課程時代、家族性大腸腺腫症という疾患により大腸を全摘出するという患者に出会ったことでした。家族性大腸腺腫症は大腸に100個以上のポリープが発生する遺伝性疾患で、当時はがん化する前に大腸を全摘出することが一般的でした。

その患者さんが排便というセンシティブな場面で苦労が多い状況に置かれていることに驚き、看護にできることは何かを考えるようになりました。同時に、遺伝性疾患であることも知り、人生そのものを支援することが必要だと痛感したのです。

当時は遺伝性腫瘍に関与する医師も看護師もごくわずかでしたから、周知・普及することの必要性も感じていました。そんな中、1998年に日本家族性腫瘍研究会（現在の日本遺伝性腫瘍学会）が第1回家族性腫瘍カウンセラー養成セミナーという研修会を開催。この研修会に初回から参加し、翌年からは開催側として遺伝カウンセリングのロールプレイシナリオを作成して運営するなど実践してきました。

今後の医療においては、がんに限らず、疾患の診断や治療方針決定にゲノム情報が関連してきます。これからの医療を支える人材である学部生には、ゲノムに関する基本的な知識と遺伝リテラシーを伝えていきたいと考えています。

Profile
村上 好恵
1990年弘前大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程卒業。1999年兵庫県立看護大学大学院看護学研究科修士課程修了。国立がんセンター研究所などを経て、2008年聖路加看護大学大学院 博士（看護学）。2012年東邦大学看護学部教授就任。2024年より現職。2016年日本サイコオンコロジー学会学会賞、2017年東邦大学教育賞を受賞。

詳しくはWebサイトへ
詳細インタビューや動画もご覧いただけます

S-face　検索

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス（SFC）
慶應義塾大学 SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436（ダイヤルイン）
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp